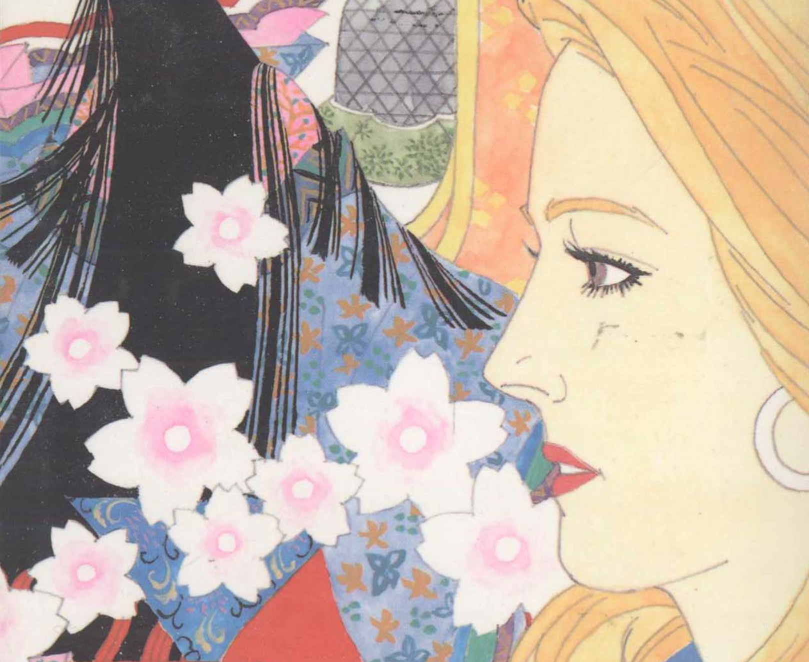

KAPPA NOVELS

長編推理小説

清少納言殺人事件

せい しょう な ごん

山村美紗

お願い――

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、最近、「カッパ・ノベルス」にかぎらず、どんな小説を読まれたでしょうか。また、今後、どんな小説をお読みになりたいでしょうか。読みたい作家の名前もお書きくわえいただけませんか。

どの本にも一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三
(〒112-11)

光文社「カッパ・ノベルス」編集部

長編推理小説　清少納言（せいしょうなごん）殺人事件

1993年3月25日　初版1刷発行

著者　山村（やまむら）美紗（みさ）
発行者　大坪昌夫
印刷者　堀内俊一
東京都千代田区三崎町2-18-11
堀内印刷

発行所　東京都文京区音羽2
振替 東京 6-115347
株式会社 光文社
電話 東京(3942)2241(代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。　(榎本製本)
表紙の模様・意匠登録 116613
© Misa Yamamura 1993

ISBN4-334-07034-5
Printed in Japan

清少納言殺人事件

山村美紗

KOBUNSHA
カッパ・ノベルス

清少納言殺人事件　目次

第一章　清少納言の墓碑　5
第二章　新年会の殺人　27
第三章　容　疑　者　52
第四章　惨劇の予感　74
第五章　第二の殺人　95
第六章　新春かるた会　116
第七章　清少納言と紫式部　139
第八章　犯行現場　168
第九章　節分の惨劇　191
第十章　真　犯　人　213

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertc

イラストレーション　深井国

第一章　清少納言の墓碑

1

暮れも押しつまったある日、浜口一郎のところに、キャサリンから電話がかかってきた。
「イチロー、大学のほうはもうお休みになったのでしょう？　これから百貨店へでも行かない？」
「いや、今日はこれからちょっと出かけるところがあるんです。明日じゃ駄目ですか？」
「あら、どこへ行くの？　大学の関係？」
キャサリンは、意外そうに言った。
勤め先の大学関係の仕事以外なら、キャサリンが誘えば、すぐに承知する浜口だったからである。
「いや、大学の仕事じゃないんですけど、ちょっとプライベートな用事で……」

「まさか誰かとデートするんじゃないでしょうね？」
キャサリンが、心配そうに言った。
「違いますよ。両親の墓詣りです。年末だから墓掃除に行って、花でも挿してこようかと思っているんです。秋のお彼岸には、忙しくて行けませんでしたからね」
「親戚の人か誰かと一緒に行くの？」
「いいえ。僕一人ですよ。東山区の泉涌寺というところです。あまり時間はかからないと思いますから、それがすんでからでよかったら、百貨店へ行ってもいいですが……」
「私も一緒に行っていい？」
「えっ、お墓にですか？」
「イエス。イチローのご両親のお墓なら、私もお詣りしたいわ」
「それはうれしいな。じゃあ、これから迎えに行きますから、用意をしておいてください」
「わかったわ」
電話が切れたあと、浜口は苦笑した。
キャサリンが、墓詣りに行ってくれるのはうれしかったが、反面、ちょっと迷惑でもあった。
一年に一度くらいは、墓の前で、しんみりと水入らずで、両親と話したいという気持ちがあったからである。
〈親子水入らずという言葉を、キャシイに理解させるのは無理だろうな〉

しかし、約束したので仕方がない。浜口は、車に乗り、キャサリンの家に向かった。
チャイムを鳴らすと出てきたキャサリンの姿を見て、浜口はびっくりした。
彼女は、黒いスーツに黒い靴下、黒い帽子、黒いコートというように、黒ずくめの服装だったからである。
「どうしたの？　イチロー、何かおかしいの？」
キャサリンは、無邪気にきいた。
「いや、その……、まるでお葬式か、お通夜に行くような恰好だから、ちょっとびっくりしたんですよ。僕なんか、ほら、こんなラフな服装をしてるでしょう？」
「あら、ほんとだわ。私、イチローのご両親にはじめてお目にかかるのだから、正装じゃないといけないと思って」
「いいんですよ。もっと気軽な恰好で。その姿じゃ、あとどこへも行けないでしょう？」
「そうね。じゃ着替えてくるわ」
キャサリンは、そういうと、身をひるがえして家に入り、すぐに、ブルーのワンピースとコートに着替えてきた。
「これでいいかしら？」
「オーケー、じゃあ行きましょうか？」
二人は車に乗って出発した。

途中で花と線香を買い、東山通を走らせる。
「ねえ、センニュージってどんなお寺?」
キャサリンがきいた。
「うちの宗教は真言宗ですから、真言宗泉涌寺派の大本山ですね。まつられている本尊は、釈迦如来です」
「ああ、オシャカサマね」
「天長(八二四~八三三)年間空海が創建、八五六年に、藤原緒嗣という人が帰依した神修上人が、法輪寺として建立したのが最初だそうです。のちに仙遊寺と名前を変えたのです。今の漢字とは違っていますが。その後荒廃して一二一八年に再建され、名前が今の泉涌寺となり栄えたということですね。代々の天皇の御陵となっています」
「どんな天皇の御陵があるの?」
「現在でも、四条、後水尾、明正、後光明、後西、霊元、東山、中御門、桜町、桃園、えーと、ちょっと待ってください」
浜口は、車を停めて、ポケットからメモを出して読みあげた。
「後桜町、後桃園天皇の月輪十二陵と、光格天皇、仁孝天皇の後月輪東山陵、英照皇太后の後月輪東北陵などがあります」
「よく知ってるのね」

「キャシイがきくだろうと思って、出がけにメモしてきたんですよ」
「じゃあ、天皇のお墓ばかりなのね。イチローの先祖も天皇だったの？」
「違いますよ。普通の家のお墓も少しはあるんですよ。めったなことをアメリカのお父さんに言ったりしないでください」
浜口が、あわてて言った。
キャサリンが、アメリカの父親に、イチローは天皇家の子孫だなどと言っては、困るからである。

2

車を再びスタートさせながら浜口が言った。
「塔頭にも有名なお寺がありますよ。雲竜院、善能寺、来迎院、観音寺、悲田院、新善光寺、戒光寺、法音寺院、即成院などです」
「それもメモに書いてあるの？」
「いいえ。お正月の十五日に、京都の人は、七福神詣りといって、笹を持ってこれらのお寺を順に詣る行事があるんです。だからよく知っているんです。そういえば、ここしばらく行ってませんけど、笹にそのお寺のお守りをつけてまわるので、それはすごい賑わいですよ」

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertong

「あら、京都にいるのに知らなかったわ。今度連れていってくれる？　イチロー」
「いいですよ」
話しているうちに、車は泉涌寺に着いた。
二人は、車を大門の前に停めて中へ入っていった。
入口に、拝観券を売るところがあって、パンフレットもくれる。
「ずいぶん立派なお寺ね。まるで御所みたいに格調が高く広いわ」
キャサリンは、あたりを見まわした。
二人は、まっすぐ歩いて仏殿に行った。
「仏殿は、桁行三間、梁間三間、一重裳階付き、入母屋造り、本瓦葺きで、禅宗様仏殿遺構の中でも、最大級の規模を持つと書いてありますよ」
浜口が、漢字の苦手なキャサリンのために、パンフレットを読んだ。
仏殿の鏡天井には、竜が描かれ、三尊像の後壁の背面には、白衣観音の水墨画がある。二人は、賽銭を投げておがみ、横で売っているお守りや腰さげなどを買った。
「ここには、清少納言のお墓もあるんですよ」
浜口が、歩きながら言った。
「えっ、セイショーナゴン？　あのオノノコマーチなどと同じ女流歌人のこと？」
「そうです。えーと、どこかに歌碑があるはずなんですが……」

浜口があたりを見まわした。
「あ、あのあたりみたいですよ」
それは、大門から入ってすぐの右側にあった。
四角いプールか噴水のような区切りの中には、水がたたえられ、そのまわりは、柴垣で囲われている。
その横に「清少納言歌碑」と書かれた立て札があって、隣りには、歌の書かれた碑が立っている。
「これ何と読むの？　私読めない」
キャサリンが、変体仮名(がな)の歌を指していった。
「さあ、僕も自信ないですけどね……」
しばらく字を見つめていた浜口は、
「あっ、わかった！　ところどころ読めるから見当がつきましたよ。百人一首にある歌ですね」
と、言った。
「『夜をこめて　鳥のそら音は　はかるとも　よにあふ坂の　関はゆるさじ』長徳(ちょうとく)三年の七月、彼女が書道で有名な藤原行成(ふじわらのゆきなり)へ贈った歌ですね」
「そういえば、私も知ってるわ。でも、どういう意味だったかしら？」
「まだ夜の明けぬうちに、鳥の鳴き声でだまして通ろうとされても、中国の函谷関(かんこくかん)ならばとにか

く、あなたと私の逢坂の関は、通ることを許しませんよ——という意味ですね」
「アハハ、面白いわ」
「あれっ、こちらに、説明が出ていますよ」
浜口は、別の木札のそばに行った。
「今の歌に対して、藤原行成が返した歌があります。『逢坂は　人越えやすき　関なれば　鳥鳴かぬにも　開けて待つとか』とやり込めていますね」
「素敵ね。そういう歌が交わせる男女って、文化的水準が高くて」
キャサリンは、感心したように言った。
二人は、浜口の家の墓のある寺へ向かった。
墓のまわりには、枯れ葉が一面に散っている。二人は、その枯れ葉を掃き、寺でもらってきた水を墓にかけた。
「ねえ、お水をかけて寒くないかしら？」
「びっくりして目が覚めたかもしれませんね」
竹筒に花を生け、線香をたいて、二人は手をあわせた。
「キャサリンです。はじめまして」
キャサリンが、神妙な顔をさげた。
「ねえ、イチロー、ご両親は、私のこと気に入ってくださったかしら？」

墓を背にして歩きながら、キャサリンが言った。
「たぶんね。美人なので、びっくりしたんじゃないかな」
「本当？」
キャサリンは、うれしそうに微笑んだ。

3

「セイショーナゴンて、どんな人だったのかしら？」
枯れ葉の積もる坂道を歩きながら、キャサリンがきいた。
「『枕草子』を書いた女性ですよ。平安時代では、小野小町、紫式部などとともに、女流文人として有名です」
「マクラノソーシ？　どんなストーリーなの？」
「えっ、『枕草子』を知らないんですか？　あ、そうか、キャシイはアメリカ人なんだ」
「そうなの、残念ながら。でも、日本文学には興味を感じているし、『源氏物語』とか小野小町については知ってるわ」
「えーと、『枕草子』というのは、小説じゃなくて、エッセイなんですよ。平安時代に、中宮の定子という人に仕えて見聞きした王朝貴族の生活を、華麗で優雅に表現し、それにユーモアや風

刺を加えて、エッセイに仕立てあげているわけです」
「ぜひ読んでみたいわ」
キャサリンは、目を輝かせた。
「確か英訳もあったと思いますけどね。英訳では、言葉遊びのかもし出すシャレやムードはちょっとわからないかもしれないけど」
「私、オノノコマーチとか、ムラサキシキブは知ってるわ。コマーチというのは、日本の美人の代表でしょう? シキブ・ムラサキは、『源氏物語』という宮廷のラブロマンスを書いた人と聞いているわ」
「そのとおりです。ちょうど、そのころの人です。紫式部が、清少納言の悪口を言ったりした文が残っていますからね」
「あら、面白いわ。何と言ったの?」
「紫式部が『清少納言こそ、したり顔にいみじうはべりける人……』と、そこまでしか覚えていませんが、賢しげに、いろいろなことを書き散らしているけど、大したことはない。こんな人の末路はロクなことはないだろうと、それはそれは、こきおろしているんです。女の戦いですね」
「まあ、それで、清少納言は何と言ったの?」
「いえ、彼女は、何も反論していません」
「じゃあ、彼女のほうが上手なのかしら?」

「わかりませんね。しかし、清少納言が才気に富み、漢学などの知識が豊かで、文才があったことは確かなようですよ。ただ、それが、時としては、反感を買ったかもしれないけど」
「彼女って興味があるわ」
　キャサリンが言った。
「彼女が、『香炉峰の雪は？』ときかれて、『すだれを巻きあげてみる』と答えたのは、有名な話です。漢文の故事を心得ていて、それから引用したわけですから、それに比べて『紫式部日記』によると、彼女の仕えていた中宮彰子の親王誕生五十日目の祝宴が、道長のところで催されたとき、いわば、無礼講ともいうべき席で、紫式部は、当時第一等の才人とうたわれた藤原公任から呼びかけられたのです」
「何といって？」
「『あなかしこ、このわたりに、わかむらさきやさぶらふ』って。それに対して、紫式部は、公任を相手にせず黙殺したというのです。『わかむらさき』というのは、紫式部の書いた『源氏物語』の登場人物ですから、公任としては、お世辞のつもりだったと思うのです。このへんに、若紫さんはいませんか？　と言ったわけですから」
「なぜ、何も答えなかったのかしら？　私だったら喜んで答えたと思うけど」
　キャサリンが言った。
「紫式部は、『源氏に似るべき人も見えたまはぬに、かの上は、きいていかでものしたまはむ』

试读结束：需要全本请在线购买：　www.erto